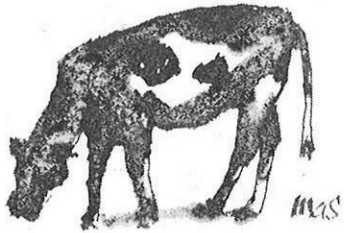


隋想



筆を選ぶ

中村龍石

書の内容を書くには、筆、硯、墨、紙等があるが、何といても、筆は書家の生命である。書き易い筆、気に入った筆と一本一本吟味し、書きなれた手頃の筆が何時の間にか箱一杯になっている。そんな沢山の筆があるのかとよく聞かれるが、どの筆にも夫々異った書き味があり、作品によって使いわけるので、どの筆も手放す気にはなれない。

長年、書の研究に明け暮れているが、これほど思う筆は何本もないもので、使っていくと放っておいたのが後になって使い良かたりするから不思議なものである。選りごみをしていたら何本、いや何十本あっても足りないのも筆である。実にむづかしい。

古い羊毛の戴月軒の唐筆は二十五年も前に入手したのだが、味わい深い線の出る筆で今尚大切に愛用している。さて、筆は中国産（現在は大部分品質が

落ちてい）と日本産とがある。中国の筆には注文をつけるわけにはいかぬので、既製品で間に合わせるほかはないが、日本の筆屋には、鋒の長さ、大きさ、毛の種類、その組合せ方、腰の強さ等注文をつけて作らせる。その筆に墨を含ませサリと書き流す味はまた格別である。

「弘法大師、筆を選ばず」というが、空海から嵯峨天皇へ奉進したものに「狸毛筆筆表」があり、書体によって、強柔大小を選ばずべきであると筆を作らせて贈っている。名工は刀を選ぶと同様に筆も大いに吟味すべきであろう。

わが国には応神天皇十六年、百済の王仁が論語や千字文を伝え、二十年には帰化した人によって代々筆を司ったといわれている。

筆は古くから、鹿、兎、狸、馬等が用いられ、鹿の夏毛は珍重されていたようである。羊毛の筆は江戸時代初期以後のようであるが現代何といても一番使われているのは羊毛である。

私も大部分羊毛と「いたち」を使っているが、だんだんやめているうちに、次々と変った筆を使ってみたくなるもので、墨を含ませると筆先がダンゴのように丸くなる鶏毛、筆先は利かないがそれでも面白い線の出る孔雀の毛、毛にウエーブのある猿の毛、筆先が大きくならないむさびの毛等、それぞれ風趣がある。

筆で最も変わり種は胎毛筆である、これは人間の赤ん坊の生毛で作った筆で、生後三、四ヶ月が最適とされている。初

っているとのことであった。

かつて結核患者多発、全国一だった長野県は現在死亡率も、罹病率も全国一低く、西欧クラスの優秀県である。

長野の宿に泊ることは今度で三回であるが宿の食膳に有色の食品がけっして出ない。

長野県では現在、まさりもの入らぬ味噌が一手に製造されて、各家庭に配給するシステムができていくとき。

また、老人七十才以上、幼児二才までの病気の治療を無料にしていく制度が広がっているとも聞く。

長野県では毎年、県民の祈りとして、核禁大会が盛大に行なわれることも聞いている。

このような一連の事例の根源は何であろうかと、知人にたずねてみたら、「長野県では子供のために大人は何をすべきかということが、いつのまにか県民生活の悲願となつてしまったということである。」

それにしてもこの願いが、運動が宿の女中さんにまでひろがっていくとは何という、おどろくべきことであろう。

長野はそばの花と、くわ畑に代表される、まずしい歴史をもつ県ときいてきたが、その物の乏しさの中で、このような大切なものがこのように大きな根をはり大木となつていたのである。

(県婦人会連絡協議会々々)

水

緒方益夫

健軍町の市電の終点から、益城町に向けアスファルトの道を制限速度で十分も車を飛ばせると、木山の街に着く、中央から右にそれて御船町へ向けて五分位走ると赤井という部落につく、その左手の山裾に灌漑用の溜池がある。この溜池は冬はサブタと呼ぶ「せき」を落して水を放水してしまう。すると山手の崖から赤い溶岩の壁を伝って幾百条とも知れず、細い水流が簾をかけたように流れ出す。奇麗な湧水が白く光って、まるで素麵を流しているようだ。近所の人は素麵滝と呼んでいる。

夏は「せき」を閉ざして水を溜めるので、湧水は水面の下にあつて滝は見えない。清冽な水は深い所で五メートルもあるのだが、底の藻も、それに遊ぶ鯉（くわい）やあぶらめの群も透けて見える程である。

夏休みになると、大小の河童達が泳いでいるが、あまりの冷さに五分と入っていないで、陽だまりを見つけては甲羅を干している。

私はここが好きで暇を見つけては遊びに来る。この水は水質がよくて大層おいしい。

この水を見るたびに、引揚の時に水で苦勞した事を思い出すのである。こんな

めて切った頭髪の毛先の尖った柔かい毛で作らねばならないので、後で伸びた毛は筆にならない。胎毛筆は原料が入手難なので、大量生産というわけにはゆかず、従つて市販されていない。そこで知人の家にお産の予定があると、生れ出る赤ん坊の胎毛を予約に行く。やっと手に入れ筆屋に送り作つたものを愛用しているが、墨を含ませると、グラリと垂れ下つて、穂先が一度傾くと元の形には戻らない。子供が水泳から上つた頭の毛を想像すればよい。胎毛は腰が柔かくヒョロヒョロして一寸書き難いが、馴れると又他の筆では表現出来ない面白い線が出る。

お世辞にも快適とは言えなかったけれども、木曾谷の寝覚の床に歓声をあげ、塩尻駅の草もちに退屈をしのぎ、長野盆地が眼下に展開する最後のトンネルの前と後に静かに佇む姥捨山や、田毎の月の昔語りに旅情をそそられ、けっこう楽しい旅であった。

長野の旅

波多野ガク

長野県に四度目の旅をしたのはことしの五月の末であった。

「結核予防全国大会」という、いかめしい名の会に出席を命ぜられた女性だけ四名の一行が名古屋で長野行き急行のりかえて、長野に先着の衛生部の先生方に合流したのは、二十八日の午後三時頃であったらうか。

日本の屋根といわれている長野県への汽車の旅は幾重にも重なる山脈や盆地を縫いながら、這うようにのろのろとい

水があつたら脱水状態で死んで行つた沢山の幼児を生きて連れ帰れたのに、と悲しい思いにくれるのである。

日本敗戦と云う現実を迎え、突如として、しいられた満洲国崩壊に伴う国民混乱のさ中、関東軍はいち早く遁走し満洲国政府も消滅し、在留日本人は何の防衛手段も持たぬまま、全満にひろがった満人暴徒やソ連軍の略奪、暴行の中に置き去りにされた。加えて奥地からの避難民が流れ込み、発疹チフスの蔓延、生活苦からくる一部日本人の夜盗、強盗の横行などで物騒然たるものがあつた。

こんな状態の中で首を長くして引揚の始まるのを待つて居た。やがてソ連軍に代つて中共軍が駐留して来た。

しかし中共軍は蔣介石のひきいる国府軍と戦闘中であり、新京方面の攻防が盛んであつて、ハルビンとの中間第二松花江をはさんで交戦中、赤十字社の斡旋で在留日本人の引揚げが始まつた。当時中共軍に留用中であつた私も、第一回の引揚げに潜入して、五歳に三歳の娘を連れて貨車に乗り込んだのである。引揚団員は約千人であつたが、その中の四十人位は幼児であつた。平時五時間位で列車で行ける距離を二日もかかつて停戦地帯に到達した。第二松花江の鉄橋や、数キロに亘る鉄道も両軍のために破壊されていて、小さな渡船が赤十字社の厚意で用意されていたが、それも日中丈で夜は動いて居なかつた。

一刻も早く第二松花江を渡つて終わねば、どんな事態が起るかも知れないので

九州勢七県は昔の善行寺の門前町に当る東門の近くの、もの静かな宿に、札がはられていた。

むかえてくれた宿の従業員の一つも事ながらの素朴でこまやかな接待ぶりは信濃ならではのゆかしいあじわいであつた。

一行はその日、大方、観光に出かけられたが、私は司会者の役をもつていたので、一人宿に残つて準備を整え、打ち合わせ会に出席した。七時すぎ宿にかえつて、一人で夕食をすませたが、一行の話によると、今度もまたすでに長野の土産話が生れていたのである。

その日の夕食は七県合同で行なわれたそうだが、いくばくかのビールに氣持のほぐれた男性側から「この町にはおもしろいあそび場はないか」という問がとびだしたということである。このたずねに対して、女中さんは、「長野県は教育県であり、青少年に悪い影響を与えるようなあそび場はない」と答へた。そして「あそび場はひともありません」と、ここにこして答へたと云う。その態度はほこりにみちた長野県人としての答へ方であつたということであつた。後でみると、長野県にはトルコぶるも、モーターも、出来ないことにな

炎天下の下、歯を喰いしばつて湿地帯を歩くのだ。私も三歳の児をリュックの上に乗せ、五歳の児の手を引いて、足首までぬかる湿地帯を急いだ、既に水筒の水は補給するすべもなく空になつて居た。

ようやく渡し舟に乗つて国府軍陣地まで歩くと、途中夜営する部落を探し出し、何とか水のある井戸を探し当てたところ

「ここはコレラ地帯で絶対に水を呑んではいけない。」と上部からの命令である。子供達も大人も咽喉がからからに渇いて、ぐんぐんとして居る。まよよと思いかくれて水筒に水を満し、誰もいない処で娘達に腹いっぱい水を呑ませ、その代り、リュックの底からクレオソートを取り出し十二分に服薬させる。しかしその後二、三日は発病するのではないかと随分心配したものである。おかげで、うちの娘らはどうやら元氣になつたものの、他の団員の五歳以下の子供はほとんど死に絶えて、大休止のたびに大人達は子供の墓を掘らねばならなかつた。これは全く悲惨な事だ涙なしには見る事が出来なかつた。平時は三日もあれば行ける内地に七十五日もかかつて、佐世保に上陸したが、遺骨も持つて帰れない団員の親達に氣の毒ではあつたが、娘達を何とか連れ帰る事に成功した。

これもひとえに水のおかげであると思ひ、この素麵滝のミネラルウォーターを飲む自分を素晴らしいものだと思ひ、熊本に生れ熊本に住むということは何と幸福なことであらうかと思ひ続けている。

(熊本市歯科医師会長)